

# 大阪府立中之島図書館蔵中西文庫本『浜松中納言物語』について

赤迫 照子

【キーワード】 浜松中納言物語、伝本系統、大阪府立中之島図書館、中西文庫、足代弘魚、本居宣長、伊勢神宮

## はじめに

大阪府立中之島図書館が所蔵する『浜松中納言物語』写本といえ  
ば、萩原宗固の考証の書人と屋代弘賢による校合・書入のある不忍  
文庫旧蔵本が夙に知られているのだが、本稿で報告するのは未紹介  
の中西文庫本（以下、「中西文庫本」）である。

中西文庫本については既に平成20～22年度科学研究費補助金基盤  
研究（C）「『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代  
における物語享受の研究」報告書（平23・3 研究代表者西本寮子  
研究協力者赤迫照子 連携研究者小川陽子 研究課題番号20520170）でと  
りあげたが、他の写本との関係についての報告が中心であり、中西  
文庫本自体の具体的な書誌情報は省略した。そこで本稿では書誌事  
項・伝本系統を判別する根拠となった脱落箇所・上欄注記を掲出  
し、それらからうかがえる中西文庫本の特徴を述べる。また、報告

書を改稿し後の調査で得た情報も加えた上で、中西文庫本が属する  
伝本系統の流布状況と中西文庫本の位置づけについて言及する。

## 一 書誌

四卷四冊。帙なし。黄赤色工字繋型押表紙。題簽及び外題なし。  
各冊表紙右下に蔵書シール「中西文庫／125」を貼付。袋綴。縦27・  
8 cm×横19・4 cm。料紙は楮紙。各冊の見返に赤インキの印「大阪  
府立中之島図書館／平成15・12・22／757542（巻二は  
757543、巻三は757544、巻四は757545 資料番号のみ  
黒インキ）」あり。内題「濱松中納言殿物語卷之一（〜巻之四）」各  
冊に前遊紙一丁後遊紙一丁。墨付丁数は巻一：62丁、巻二：45丁、  
巻三：58丁、巻四：61・5丁。本文每半葉11行、和歌改行2字下げ。  
書人は上欄の注記（墨書）と、校合や補入による傍書（墨書・朱書）  
が存する。奥書なし。江戸時代後期写。虫損はなく状態は良好。

中西文庫については、国立国会図書館「レファレンス協同データベース」<sup>1</sup>において次のように掲載されている。

内容：河内郡喜里川村の庄屋、中西家関係資料。各代とも文人で、とりわけ幕末期の中西重孝（1778-1825）、多豆伎（1809-1864）父子は歌人として名高く、村田春門、伴林光平、萩原広道らとの交流をうかがわせる書簡や短冊、書画など多く含まれている。

来歴：平成5年12月、中西宗吾氏より寄贈。

中西文庫には冊子目録『中西文庫目録 付翻刻「中西家来簡抄」』<sup>2</sup>『中西文庫目録 追加』（大阪府立中之島図書館編 大阪府立中之島図書館シリーズ40・41号 平6・7）と平野翠氏「中西文庫追加（二）」<sup>3</sup>（大阪府立図書館紀要）第33号 平9・3）があり、該本は『中西文庫目録 付翻刻「中西家来簡抄」』<sup>4</sup>「古物語」の項に記載がある。

浜松中納言物語 四巻四冊

伝菅原孝標女 写 \*足代弘魚書人レアリ

中西家の書簡を翻刻した「中西家来簡抄」からは、重孝・多豆伎と文人・歌人・和学者達の活発な交流がうかがえる。本の情報交換も頻繁で、例えば加納諸平から多豆伎宛の書簡（年次不明、嘉永五年か。六月十四日）には、

うつほと栄花と此書（稿者注：『枕草子』のこと）三書校正、且諸考をあつめ候事も御座候、うつほ善本なしとは先年美隆主より申し来り候事あり、此ほど尾張と越後と二所より一本をかりて校し候、

とある。<sup>2</sup> 中西文庫蔵の「古物語」は写本6点・刊本12点の計18点で、重孝・多豆伎は当時の嗜みとしてそれなりに物語を学んだらしい。<sup>3</sup> おそらく、文人や和学者と活発に交流する中で該本を入手したのであるろう。

## 二 伝本系統（1）共通脱行箇所

『浜松中納言物語』写本は現在、四十点以上確認されている。伝本系統はまず松尾聰氏によってA～Fの六種に分類され、小松茂美氏『校本浜松中納言物語』に踏襲された。<sup>5</sup> その後、池田利夫氏によって巻四までの現存諸本（尾上兼英氏所蔵本・広島市立図書館蔵浅野家旧蔵本は巻五を除く）は全て室町末期書写の祖本から派生した一系統であることが解明され、共通脱行箇所を基準にしてA～F類は体系化されて甲類本（＝A類、脱行10箇所）と乙類第一種（＝C・F類、脱行17箇所）・第二種・第三種（＝D類、脱行26箇所）・第四種（＝E類、脱行箇所38箇所）の計五種に分類された。<sup>6</sup> したがって、新出本を調査する際、池田氏による各類の共通脱行箇所一覧と照合することで伝本系統が判別可能なのである。実際、須田哲夫氏はこの方法を用いて未紹介本調査報告をされている。<sup>7</sup>

そこで中西文庫本の共通脱行箇所を調査したところ、26箇所の共通脱行箇所を確認した。これらは全てD類で乙類第三種本（以下、「D類／乙類第三種本」と分類を併記する）の脱行箇所に該当する。

以下、池田氏・須田氏の形式を踏襲して脱行26箇所を掲出する。

最初に共通脱行箇所を通し番号と宮下清計氏校注『新註国文学叢書』(昭26・講談社)本文を示し、脱行部分には傍線を付す。続いてその頁数・行数を記す。次の( )内には脱行させた伝本の略号をA、F類の分類名とともに掲げる。略号は小松氏『校本浜松中納言物語』のものを使用し、底本のC類/乙類第一種の不二文庫本は「不」とする。○以下には中西文庫本の本文を示し、( )内に丁数・行数を記す。

なお、中西文庫本には他にも多くの脱落箇所があり、また、独自異文もあるが、ほとんどが文字の類似や目移りによって生じた誤写である。

### 巻一：8箇所

1 知らまほしきに、后、御簾をおろして入り給ひぬ。飽かずなかなかに、半なる月を 一〇二・12 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○しらすほしきになかはなる月を (八オ2)

5 眺めけむ人のやうに、この戸閉ぢられて、心細く、あるかひなき様に侍れど、 一〇九・8 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○なかめけん人のやうに侍と (一四ウ5)  
12 かへりきたるに、世に馴れぬ人にはあらざんめり。誠につつむべきにこそはあらめ。 一二五・1 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、

D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○返しきたるにつ、むへきにこそはあらめ (二八オ3)

14 なりまさるにつけても、この後の、見し人にもいとよう覚えしも見奉らほしうて、 一二八・11 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○成まさるにつけてもみたまつらまほしうて (三一ウ7)

18 ありける事のやうにて、隠し養ふに、日に日に物を引き延ぶるやうにて、ゆゆしきまで、 一三八・4 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○ありける事のやうにてゆ、しまて (三九ウ1)

22 実にあるわざにこそと思しつづく。明後日はかり帰り給はむとての夜、月隈もなく、 一五五・6 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○けにあるわざにこそと月くまもなく (五五ウ7)

24 このついでに、忍びがたき心のうちをうち出でぬべきにもさすがにあらず、 一五八・3 (B宮忍理闇歌、C松浅鷺尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩)

○このつゐてもさすかにあらず (五八オ11)

25 むげに屈じにける心なりかしや。歎きあかさむもかひなければ、泣く泣く、 一六一・1 (D居乃無春)

○むげにくんしにけりなく (六一オ5)

## 卷二：5箇所

30つかさども、挙りて待ち喜び聞えさせたる様ども限りなし。

一七〇・2 (B宮忍理闇歌、C松浅鷲尾荆不、D居乃無春、E浜神教花

千刈、F育由百狩)

○つかさともかきりなく(七〇9)

31引き違へ、さばかり限りなきものに思しかしづかれ、めでたかり

し人の 一七二・2 (D居乃無春)

○ひきたかへさはかりめてたかりし人の(九〇3)

36思ひ給へられ侍りつるを、人の御さまのなべてならぬ心地し侍り

つるに 一七九・2 (D居乃無春)

○おもひ給へられ侍りつるに(二五ウ6)

39中将の乳母は、若君具し奉りて、他船にてのぼる。心知らぬ人は

一八八・13 (D居乃無春)

○中将のめのはしらぬ人は(二四オ6)

42あはれにいみじと見奉り給て、うち泣き給ひぬる、いとさまよく

一九一・8 (D居乃無春)

○あはれにさまよく(二六オ3)

## 卷三：10箇所

66おはすらむ有様を、え聞き知らぬ悲しきを歎き給ひて、いかでか

おはすらむ有様を聞かむと、二三一・14 (D居乃無春)

○おはすらんありさまをきかんと(一九ウ4)

70おなじ色の織物ども、撫子の織物の桂重ねて、二三五ウ(D居乃

無春)

○おなじ色のおりもの、うちきかさねて(二三オ5)

71心もなし。とてもかくても言ふ方なく、思ふ方なく思ひ隔て、遙

かに 二三七・4 (B宮忍理闇歌、C松浅尾荆不、D居乃無春、E神花

千刈和、F育由保百狩)

○心もなしはるかに(二四オ3)

72情けなうこそおはしけれど、心劣りして、妬う悔しう覚えければ、

母北の方、二三八・3 (B宮忍理闇歌、C松浅尾荆不、D居乃無春、

E浜神花千刈和、F育由保百狩)

○なさけなくこそおはしければ、きたのかた(二四ウ10)

78かきませのきはだに、かやうの艶ある暁の別れを忍ばせんと、用

意せむほどは、二四三・8 (B宮忍理闇歌、C松浅尾荆不、D居乃無春、

E浜神花千刈和、F育由保百狩)

○きませのきはたにいせんほとは(二九ウ9)

94行きあひ奉りて、後の思すらん御心のうちを、見まほしく思ひわ

びつつ、二五九・2 (B宮忍理闇歌、C松浅尾荆不、D居乃無春、E

浜神花千刈和、F育由保百狩)

○ゆきあひたてまつりてわひつ、(四三オ8)

103あたらしうめでたき御女を、いたづらになして、我を心やましう

つらしと思しけむ親の御心のうちを思ひ続けるに、二六六・2 (D

居)

○おやの御心のうちを思つゝくるに(五〇オ6)

106 遁れやらんことも、さのみさかしきやうに、人々の思さんこと

もつつましう、二二七・3 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荆不、D居乃

無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)

○のかれやらん事もつゝましう(五一オ7)

108 住み離れなましには、劣ることかなと思せど、いかがは宣はむ、

などてかよのつねならんにて、二二七・6 (B宮忍理闍歌、C松浅

尾荆不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)

○すみはなれなにはよのつねならんにて(五一オ10)

109 今宵しもここにて、いつよりもけに涙を流し心砕くも、

二七〇・4 (D無)

○こよひしもこゝろくたくも(五四オ2)

#### 巻四：3箇所

117 何ばかりの事があらむと、思ふやうになづらひよる事あらじと思

ひあなづりしを、二八八・10 (B閣滋、C松尾不、D居乃無春、E

浜神花千刈和、F育由保百)

○なにはかりの事はあらしとおもひあなづりしを(二二ウ9)

126 もとよりの人とても、思ひやりありて、実に懐しう言ひあはずべ

き人もなし。三〇六・6 (B宮忍理闍歌、C松浅鷲尾荆不、D居乃春、

E浜神花千刈和、F育由保百狩)

○もとよりの人とてもなし(二九ウ1)

129 春頃より思しいそぎ、つらくすべきやうなど、委しく言ひ置き給

ふを、三〇八・10 (D居乃無春)

○春ころよりとおほしいひをき給を(三十一オ10)

### 三 伝本系統(2) 内題

脱行箇所の他に、伝本系統を判別する手がかりになるのが内題である。松尾聰氏は「濱松中納言物語題名考」において、

傳本に「濱松中納言」の題名をもつものの外に「濱松中納言物語」又は「濱松中納言殿物語」の題名をもつものがあり、前者の方は善本系統であるのに、後二者は概して悪本系統であるといふのは、前者の方が古形を保つてゐることを示してゐるのであろう。

とされ、本来は「御津の浜松」であったが、後に「浜松」と省略されたために「浜松の物語」「浜松物語」という題名が生じ、一方で『風葉和歌集』にて中納言が「浜松の中納言」と記載されたのが原因で「浜松中納言」という題名が生まれ、やがて「濱松中納言物語」「浜松中納言殿物語」が発生したとされ、この題名の変化と同時に本文も善本系統から悪本系統へと移っていったとの見解を示された。題名については宮下清計氏も首肯されている。

「善本系統」「悪本系統」についてはさておき、内題を見て分類に大まかな見当をつけられるのは確かだ、分類によって内題に特徴が見られる。須田哲夫氏は松尾氏の論に基づき、

松尾氏の論文や『校本』にて検してみるに末流のD・E・F類の内題は「浜松中納言殿物語」であったり、「浜松中納言物語」とある。・印を施したようにD・E・F類の内題には「殿物語」、「物語」とある。本物語の善本系のA・B・C類の古い形での内題は「浜松中納言」であるらしい。

とし、まずは内題によって調査対象写本の系統に見当をつけておられる。稿者も調査を始めるにあたり、中西文庫本の内題が「濱松中納言殿物語卷之一（〜卷之四）」であったので、D類／乙類第三種本であろうと見当をつけることができた。「殿物語」はD類／乙類第三種本のみに見られる特徴的な内題で、『校本』によれば『校本』に使用されたD類の写本4点①〜④の内、①②③の内題が「殿物語」である。稿者は①③はマイクロフィルムの電子複製にて確認したが、②④は電子複製を入手しておらず、実見もしていない。

① 静嘉堂文庫蔵本居春庭筆本（四卷四冊本を卷子本に改装・内題「濱松中納言殿物語卷之壹（〜卷之四）」）

② 不二文庫蔵松乃や旧蔵本（四卷四冊・「濱松中納言殿物語卷之壹（〜卷之四）」）

③ 無窮会神習文庫蔵井上頼因旧蔵本（三卷三冊 欠卷四・「濱松中納言殿物語卷之一（〜卷之三）」）

④ 松本市立図書館蔵春廼屋旧蔵本（四卷四冊・「濱松中納言物語一（〜四）」）

他にも『校本』に使用されていない写本で、内題が「殿物語」の本

は⑤〜⑩の六点が確認できる。

- ⑤ 本居宣長記念館蔵本居春庭筆宣長筆奥書本（四卷四冊・「濱松中納言殿物語卷之壹（〜卷之四）」 印「須受能屋蔵書印」あり）
- ⑥ 東京大学文学部国文学研究室蔵本居文庫本（四卷二冊・「濱松中納言殿物語卷之一（〜卷之四）」）
- ⑦ 宮内庁書陵部蔵紅梅文庫旧蔵本（四卷八冊・「濱松中納言殿物語卷之一（〜卷之四）」 印「紅梅文庫」「山口圖書」あり 卷二下冊に墨書「高道寫之」があるが見消にしている）
- ⑧ 大妻女子大学図書館蔵中川忠英旧蔵本（四卷四冊・「濱松中納言殿物語卷之壹（〜卷之四）」）
- ⑨ 神宮文庫本（一冊 卷二のみの零本・『国書総目録』に「濱松中納言殿物語」との記載あり）
- ⑩ 実践女子大学図書館蔵黒川文庫本（四卷四冊・実践女子大学図書館・実践女子大学芸資料研究所編『新版実践女子大学図書館蔵黒川文庫目録』（平22） 一一三頁に内題が「濱松中納言殿物語卷之壹（〜四）」との記載あり）
- ⑤⑥⑦は電子複製を入手し、⑦は実見もした。⑧は守屋利花氏「大妻女子大学図書館蔵本『浜松中納言物語』について」（『大妻国文』第17号 昭61・3）による。守屋氏もやはり『校本』を用いた内題と脱落箇所との調査により、大妻本をD類だと判断されている。

## 四 宣長と『浜松中納言物語』

ところで、『校本』や各論文で①静嘉堂文庫本はその奥書、

此はま松の中納言の物語四まき、こぞの冬より春庭にいひつけ  
てうつさせつ。手、まだいとをさなくうひくしげにて、見わ  
きがたき所おほかり。又、本よりもじおちひがうつしなどおほ  
くて、心得がたき事のみそおほかるを、かくもやあらんとおほ  
しき所にはそのよしかたはらにかきそへ、一わたりよみあはせ  
つ。

安永十年辛丑三月十四日 本居宣長

(引用は『校本』による。句読点は稿者)

よつて春庭自筆本として扱われているが、本居宣長記念館の御教  
示によれば、館所蔵の⑤こそが春庭本文自筆・宣長自筆奥書の本で、  
①静嘉堂文庫本は転写本である。宣長の養子大平に伝わる資料を主  
に収蔵する本居文庫の⑥には奥書はない。

『校本』によれば②不二文庫蔵松乃や旧蔵本にも宣長の奥書があ  
り、以下のような書写奥書が存するので、間違いなく⑤本居宣長記  
念館本の流れを汲んでいる。

本居大人の此おく書には、うたかはしき所、にはそのよしかた  
はらに書そへあまた所にてことくしかうつさんはことしけ  
くわつらはしければ、今はその書そへ給へるかたをとりてうつ  
し侍りぬ。 寛政十二年庚申二月

(引用は『校本』による。句読点は稿者)

小松茂美氏は「諸本解説」で書写奥書と蔵書印「松乃や蔵書」から、  
「松乃や」と号し、かつ寛政十二年生存の人物として小山田与清(天  
明三年(一七八二)〜弘化四年(一八四七))と藤井高尚(明和元年  
(一七六四)〜天保十一年(一八四〇))をあげた上で、書写者は『浜  
松中納言物語目録』を作成した小山田与清かと推定された。②を未  
見の稿者には答が出せないのだが、中西健治氏は『浜松中納言物語  
目録』が依拠した本はD類/乙類第三種本だと推定されており、稿  
者も『浜松中納言物語目録』を調査したところ、D類/乙類第三種  
本の独自異文に依拠した項目を複数確認した。<sup>13)</sup>なお、小山田与清が  
弘化三年(一八四六)に蔵書を水戸藩に献上した際の目録「松屋蔵  
書目録」に「浜松中納言物語 四」と記載がある。

D類/乙類第三種本で唯一「殿物語」の内題を持たない④松本市  
立図書館蔵春廻屋旧蔵本も、宣長及び本居学派との接点が見出せ  
る。白田甚五郎氏は蔵書印「有明里御民春廻屋」まつをかのしるし」  
等から見て、「南安曇野郡有明村に住した本居派の国学者某氏の蔵  
書であった」<sup>15)</sup>と述べられているが、なぜか「本居派」である根拠が  
明確に示されていない。

『校本』によれば、④には次のような書写奥書が存する。

文政元年寅五月以古写本令校合畢 長廣  
文政元年(一八一八)生存の「長廣」は、大平の門人で京に住んだ  
大橋長廣(天明八年(一七八八)〜嘉永四年(一八五二))ではないか。

例えば、中西文庫所蔵の、嘉永三年（一八五〇）二月二十日萩原広道から中西多豆伎宛の書簡に「来月七日日本居先生五十回忌会、於京師、大橋長広、清水寛和など相催し申候、他の人ならぬ先生の事故、私にも世話いたし、且当日出京可致様申来候」（傍線は稿者）とあり、大橋長広が本居一門を取り仕切る様子がうかがえる。もしも「長廣」が大橋長広であるならば、④松本市立図書館蔵春廻屋旧蔵本が⑤本居宣長記念館本の転写本である可能性が高い。

では、そもそも宣長は一体どこから『浜松中納言物語』写本を入手したのであろうか。『浜松中納言物語』に言及した宣長の書簡が三通残っているが、いずれも本の入手先は書かれていない。<sup>16</sup>

○安永十年（天明元年）三月十八日 田中道磨宛書簡<sup>17</sup>

一、濱松中納言物語と申物四卷有之、近頃寫し申し候故、此節他へ見せ申候、御望ニ候ハハ、追而人御覽可申候、其文章宜キ物  
二御坐候、

○安永十年（天明元年）三月十九日 荒木田尚賢宛

一、はま松中納言物語寫し申候、先一冊入御覽候、源氏様ノ文に而、其高雅ノ文章、狭衣などよりはまさり候物に御座候、誤字多く見え申候、四冊物に御座候、残りも御覽被成 候はば、追々さし上可申候、

○寛政三年正月十五日 横井千秋宛

一、内裏式御返却被下、慥ニ落手仕候、此度被仰下候内、まさ助しやうそく抄貳冊、松中納言物語四冊、入御覽申候、殿うつり、

うまつり兩部ハ所持不仕候、松かけ物語と被仰下候ハ、右の濱松中納言ヲ取違へ、松かけト先達而申上候義と奉存候、（中略）濱松をふと取違申上候義と奉存候、

宣長は傍線部のように、「其文章宜キ物」「源氏様ノ文に而、其高雅ノ文章、狭衣などよりはまさり候物」と『浜松中納言物語』を激賞している。同様の評言を門人にも語ったことは、想像に難くない。

このとき、『浜松中納言物語』は「宣長に絶賛された物語」になったのである。中島正二氏<sup>18</sup>は江戸時代における物語享受について、極めて単純に図式化すれば、『源氏物語』以外の作り物語は、

それ自身が『源氏物語』と対等の研究対象となるのではなく、『源氏物語』（あるいはその他の事柄）をよりよく理解するための資料、情報にしかすぎなくなる。そして、仲間うち、一門だけの情報、資料だけを確保しようとする。それで、手に入れた物語の写本は一門だけで貸し借りをし、書写するのにとどめ、刊行には消極的になるという傾向が生じたのではないか。

とし、本居学派の『とりかへばや』書写状況を例にあげ、一門における書写は「連帯感を強化し、成員を拘束する」行為だと指摘された。『浜松中納言物語』の場合にも当て嵌まるのではないだろうか。

絶賛しておきながら、宣長は自身の著作で『浜松中納言物語』を大してとりあげてはいない。『石上助識篇』に、

濱松中納言物語四卷 但し巻数は後の人のわけたる物かいか、しりかたし  
中納言なる人、唐にわたりてかしこにてよめる歌に、



ひのものとのみつのはま松こよひこそ

我をこふらしゆめに見えつれ、

此歌より濱松中納言とはいふなるへし、

と引き、続いて「カウサビ」「ミツワグム」「乳アユル」「オホロケ」「筆ノサキラ」「サイマグレタル」「卅四字アル歌」「ホゲツキ」「百歩ノ外」「ヨシノアナタニミヨシノト云處」「終日」「大姉」を引いて考証を僅かに加えた程度である。他には『古事記伝』で「濱松ノ中納言ノ物語に、こひしさをみそげど神のうけねばや、心のうちのすしげもなし」(六之巻 神代四之巻)のように考証のために引いた三箇所しか見当たらない。

中西健治氏は『石上助識篇』の前掲箇所について、

この歌から導くことのできる題名は、「浜松中納言」ではなくて「みつの浜松」なのであって、「みつの浜松」から「浜松中納言物語」に題名が転化してゆくことについての何らかの考証があっても然るべきかと思われる。

と宣長の浅慮を指摘されている。写本人手時はやや興奮気味の宣長であったが、結局、『浜松中納言物語』そのものには深い興味関心を抱かなかつたのである。

その一方で、『浜松中納言物語』は「宣長のお墨付きを得た物語」として後世、門人を中心に書写が繰り返されていった。このような流布状況の中で生まれた一本が、中西文庫本ではないだろうか。

## 五 上欄の注記

次に、上欄の書人について検討する。本文と同筆で、巻一に5、巻二に5、巻三に1、巻四に2の計13箇所であるが、「弘魚云」とあるのは巻一にある1箇所だけである。

足代弘魚(天明七年(一七八七)〜文化十四年(一八一七))は伊勢神宮外宮権禰宜で文化七年に春庭門人となり、大平にも学んでいる。『国学者伝集成』『国書人名辞典』によると、古典和歌に通曉し、同族の足代弘訓(天明四年(一七八四)〜安政三年(一八五六))とは畏友であったという。足代弘訓は和学を亀田末雅・荒木田久老に学び、その後、春庭・大平門人となった。著書は多く、中には『源氏物語類語』『宇津保物語頭字部類』『物語歌頭字部類』といった物語関係の著作もある。血縁関係にあり年齢も近い弘魚と弘訓は、幼少より共に学び、研鑽を積んだと察せられる。足代弘魚及び弘訓の『浜松中納言物語』所蔵状況は確認できていないが、中西文庫本は天折した弘魚か、足代弘訓所蔵本を転写した一本だと思われる。書人「弘魚云」は弘魚本人ではなく、弘訓によるものかもしれない。「弘魚云」の書人は、若き日の弘訓と弘魚による『浜松中納言物語』研究の痕跡ではないだろうか。手がかりを求めて文化十四年弘魚自筆の『足代家日記』(二冊)を京都大学大学院文学研究科図書館にて実見したが、『浜松中納言物語』及び物語書写に触れた箇所は存しなかった。

前掲の荒木田尚賢(元文四年(一七三九)〜天明八年(一七八八))

宛書簡に「先一冊入御覧候」とあるように宣長は巻一を送っており、尚賢が『浜松中納言物語』を写したと思しい。また、「三 伝本系統（2）内題」で掲げたように神宮文庫蔵本には「浜松中納言殿物語」の題が記されてあるようである。この⑨神宮文庫本は「神宮文庫所蔵和書総目録」（神宮司廳編 戎光祥出版 平17）によると、孫福弘哉氏献納本である。伊勢神宮文化圏に『浜松中納言物語』をもたらしたのは宣長であろう。足代氏に伝わったのは伊勢内宮権直である尚賢の写本かもしれない。ちなみに宣長は尚賢から「とりかへばや」写本を借り、書写している（天明五年（一七八五）正月十日 本居宣長記念館蔵「とりかへばや」奥書・天明四年（一七八四）九月二日 荒木田尚賢宛書簡<sup>21</sup>）。

さて以下、上欄の注記13箇所を掲出する。「1」～「13」に施注本文と（一）内に巻数・丁数・行数を、…の次に小学館新編日本古典文学全集（池田利夫氏校注）の本文及び頁数・行数を掲出した。○には上欄注記を記す。上欄注記に典拠がある場合は…の次に引用し、該当箇所傍線を付した。上欄注記は、「8」以外は全て施注本文の上部に存する。

「1」<sup>題</sup>たいを出してふみをつくりあそびをして（巻一・三才5）…題を出だして文を造り、遊びをして（三四・5）

○弘魚云ふみとあるは詩の事也物語出にはすへて<sup>マ</sup>といへ又遊とは雅楽の事なり

「2」らんせいえんのあらしのとわかやかなるこゑあはせて（巻一・

七ウ8）…「蘭蕙苑の嵐の」と若やかなる声合はせて（四一・3）

○朗詠 蘭蕙苑風摧紫後…『和漢朗詠集』秋・二七二・菅文時・菊「蘭蕙苑風摧紫後 蓬萊河月照霜中」<sup>22</sup>

「3」ひのものとのみつ。のはま、つこよひこそ我をこふらし夢に見えつれ（巻一・二六才1）…日本の御津の浜松こよひこそわれを恋ふらし夢に見えつれ（五三・8）

○万一 去来子等早日本辺天伴乃御津乃濱松待恋奴良武…『万葉集』巻一・雑歌・六三・山上憶良「去来子等早日本辺天伴乃御津乃濱松待恋奴良武」

「4」春やむかしのとのみ思ひまかへたるにも（巻一・一六ウ1）…「春や昔の」とのみ思ひまがへたるにも（五四・7）

○月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとのみにして…『古今集』恋五・七四七・在原業平、「伊勢物語」第四段「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」

「5」天にあらはひよくの鳥となり地にあらはれんりの枝とならん（巻一・三四ウ5）…「天にあらは比翼の鳥になり。地にあらは連理の枝とならん」（八二・3）

○長恨哥 在天願作比翼鳥在地願為連理枝…『長恨歌』第一一七・一一八句「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」<sup>23</sup>

「6」くちおしさはまくらよりあとよりこひのせめくる心地して（巻二・一一才3）…口惜しきは、枕よりあとより恋の責め来る心地して（二四〇・2）

○古今 枕よりあとより恋のせめくれはせんかたなみぞ床中にをる  
 …『古今集』雑体・一〇二三・詠み人しらず「枕よりあとより恋のせめ  
 くればせむ方なみぞ床中に居る」

〔7〕こまやかにのちせの山をたのめて出給なんとす（巻二・一五オ  
 4）…こまやかに後瀬の山を頼めて、出で給ひなむとす（一四六・8）

○新拾遺 坂上大嬢 とにかくに人はいへとも若狭ちの後世の山の  
 後も逢ん君 返し 家持 後世山後もあはんと思ふにぞしぬへき  
 物をけふまでもあれ…『新拾遺集』恋四・一二三〇・坂上大嬢「とに  
 かくに人はいへども若狭路ののちせの山の後も逢はん君」、同一二三一・  
 大伴家持「のちせ山後も逢はんと思ふにぞしぬべきものをけふまでもあ  
 れ」

〔8〕ほけつきもてなしてけさうちかけ（巻二・三〇オ7）…「ほけ  
 づきもてなして、袈裟うちかけ」（二七〇・1）

にひろかうそめなとあまたかさねてうちやつれ給へるいろく  
 にしやうそきたらんよりもなまめかしきさまかはりほけつきたう  
 とけになりて（巻二・三二オ5）…鈍色、香染など、あまた重ねてう  
 ちやつれ給へる、いろいろに装束きたらむよりも、なまめかしきさま変  
 り、ほけづきたふとげになりて（一七一・8）

○にひ色香染などあまたか、ねとほけつきたふとけに成て云々

※注記は巻二・三〇オ7の上欄にあり。

〔9〕かたみはいたけにあらむかしゆらくとそきかけられていつへ  
 のあふきなどをひろけたらん心地して（巻二・三〇ウ9）…髪は、

居丈にあらむかし、ゆらゆらとそきかけられて、五重の扇などを広げた  
 らむ心地して（一七一・2）

○日きたるかたちに髪えの扇をひろけやうなり…『源氏物語』手習・  
 三五頁「いまめきたる容貌に、髪は五重の扇を広げたるやうにこちた  
 き末つきなり」

〔10〕思いてらるゝこひしさのむなしき空にみちぬる心地のするま、  
 に（巻二・四〇オ10）…思ひ出でらるる恋しさの、むなしき空に  
 満ちぬる心地のするまに（一八六・7）

○古今 我恋はむなしき空にみちぬらん思ひやれとも行かたもな  
 し…『古今集』恋一・四八八・詠み人しらず「我が恋はむなしき空に満  
 ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

〔11〕ふしみのさとならねとやかてわかよもへぬへくたちかへりにへ  
 けれと（巻三・一四オ2）…伏見の里ならねど、やがてわが世も経ぬ  
 べく立ちかへりにくけれど（二二八・9）

○いさこゝに我世はへなん菅原やふしみの里のあれまくもをし…  
 『古今集』雑下・九八一・詠み人しらず「いさこゝに我が世はへなむ菅原  
 や伏見の里の荒れまくも惜し」

〔12〕たまのうてなもなにならす（巻四・二五オ6）…玉のうてなも何  
 ならず（三三二・3）

○六帖 なにせんに玉のうてなも八重葎はつらん中にふたりこそね  
 め…『古今和歌六帖』第六・三八七四・紀貫之・葎「何せんに玉の台も  
 八重葎いづらん中に二人こそ寝め」

〔13〕おほ井の物かたりのやうにとともにかくのこゑをまちつけんとのみちきりかはし給さま（巻四・二六ウ10）…大井の物語のやうに、ともに楽の声を待ちつけむとのみ契りかはし給ふさま（三三四・9）

○狭衣 大井の物語のやうならん限りの道にも見え捨給はしと云々  
…『狭衣物語』巻三・一九四頁「大井の物語のやうならずは、限りの心地にも見捨てたまはじ」

## 六 中西文庫本と神習文庫本・紅梅文庫旧蔵本

調査開始当初、中西文庫本上欄注記の「9」が、「日 きたるかたち」に髪えの扇をひろげやうなり」と乱れた文であるのを奇妙に思っていた。施注本文は尼姫君の描写であり、「髪」「扇」とあるので「9」は『源氏物語』手習巻にある浮舟の出家姿の描写だと見当がつく。ではなぜこのような文なのかと気になっていたのだが、③神習文庫本と⑦紅梅文庫旧蔵本のマイクロフィルム電子複写を入手し、さらに⑦紅梅文庫旧蔵本を実見して事情が判明した。

無窮会蔵マイクロフィルムの電子複写によれば、③神習文庫本（巻四欠）には上欄注記が巻一に6、巻二に6、巻三に3と計15箇所あり、その内11箇所は中西文庫本巻一〜三の上欄注記全11箇所とほぼ一致するのである。そして「9」該当注記には次のようであった。電子複写にあるままの姿で掲出する。

〔9〕該当注記（神習文庫本）

手習

今めきたるかたちに髪

はいつえの扇をひろげ

たるやうなり（巻二・三三丁オ）

⑦紅梅文庫旧蔵本は、国文学研究資料館蔵マイクロフィルムの電子複写によれば上欄注記は巻一に5、巻二に5、巻三に2、巻四に3と計15箇所ある。巻一〜三の12箇所は③神習文庫本15箇所の内12箇所とほぼ一致する。「9」該当注記には次のようであった。

〔9〕該当注記（紅梅文庫旧蔵本）

白

きたるかたちに髪

えの扇をひろげ

やうなり（巻二下一一丁オ）

⑦紅梅文庫旧蔵本の上欄注記はいずれも上部ぎりぎりの所にある。「9」該当箇所は、各行頭に「今め」「はいつ」「たる」を加えれば神習文庫本と同じである。それに「白」は「手習」の「手」字と「習」字の「羽」の部分が欠けたものと推定される。他の上欄注記にも、行頭の文字の上部が欠けたものがある。⑦紅梅文庫旧蔵本は化粧断をして、文字部分を落としてしまったのではないか。それに「7」〔11〕該当箇所は上欄に書かれたものではなく、書入された紙片が上欄に貼付されている。もしかすると他にも貼付された紙片があったが、剥がれてしまったのかもしれない。

科研報告書に拙稿を提出後、宮内庁書陵部で⑦紅梅文庫旧蔵本を

実見したところ、やはり化粧断されていた。中西文庫本は化粧断されておらず上欄部分は7、8mmの余裕があるのに「9」は、

日

きたるかたちに髪

えの扇をひろけ

やうなり

とあるので、明らかに化粧断後の紅梅文庫旧蔵本を転写したものである。⑦紅梅文庫旧蔵本「9」該当箇所「白」字の上部「ノ」が僅かしかなく、注意して見ないと確認できないので、「日」と転写されたのであろう。

上欄に紙片が貼付されている「7」該当注記（上二七オ）は、紙片の上部が一度切り落とされており、その切り落としの紙片裏に糊で紙を継いで、下部の紙片裏と繋ぎ合わせてあった。現物確認の大切さを痛感させられた調査であった。<sup>26</sup>

このように、中西文庫本と⑦紅梅文庫旧蔵本は非常に近い関係にある。そして中西文庫本・⑦紅梅文庫旧蔵本には存しない上欄注記があり、「弘魚云」の注記をもう一箇所有する③神習文庫本が、最も古い形を伝える本だと推定される。以下、中西文庫本には存しない、③神習文庫本・⑦紅梅文庫旧蔵本の上欄注記を記す。

③神習文庫本のみに存する上欄注記：3箇所

・あひうちのみしくほひかほりて（巻一・六ウ5）…あいきやう、いみじくにほひかをりて（四〇・6）

○弘魚云あひうちほひかといへり詞の前後したる歟

・ふるさとのみかさの山に思ひなしこよひの月はこゝにきてみよ（巻二・一二オ6）…ふるさとの三笠の山に思ひなし今宵の月はここにきてみよ（二四一・6）

○古今 天のはらふりさけ見ればかすかなる三笠の山に出し月かも  
…『古今集』鞍旅・四〇六・安倍仲磨「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

・おもひかけすにはかなるもしほのけふりのくちおしさを（巻三・二九ウ2）…思ひかけすにはかなる藻塩のけぶりの口惜しさを（二三九・4）

○古今 すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬかたにたな引にけり：『古今集』恋歌四・七〇八・よみ人しらず「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたな引きにけり」

③神習文庫本⑦紅梅文庫旧蔵本に存する上欄注記：1箇所

・なくにしとまるものならば（神 卷三・三九オ10／紅 卷三下・一三オ6）…泣くにしとまるものならば（二五三・12）

○散花の鳴にしとまる物ならば我鶯におとらましやは：『古今集』春下・一〇七・典侍治子朝臣「散る花の鳴くにしとまるものならば我鶯に劣らましやは」

⑦紅梅文庫旧蔵本のみに存する巻四の上欄注記：1箇所

・さそふ水あらはと思ぬへけれど（上三五ウ3）…「さそふ水あらは」と思ひぬべけれど（三二八・10）

○古今 侘びぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらはいなんと  
そ思ふ：『古今集』雑下・九三八・小野小町「侘びぬれば身をうき草の  
根を絶えて誘ふ水あらはいなむとぞ思ふ」

傍書からも、中西文庫本と③神習文庫本・⑦紅梅文庫旧蔵本の近  
しい関係が認められる。例えば⑤本居宣長記念館本の巻一「丁表7  
」8行目に「十日の〇おはしましつきぬ」とある。一番目の傍書「に  
カ」は、本文「十日の」は「十日におはしましつきぬ」とあるべき  
かと疑義を示したものである。二番目の傍書「日カ」は補入記号〇  
に線を引き、本文「十日の」と「おはしましつきぬ」の間に「日」  
を補入し、本文を「十日の日おはしましつきぬ」とあるべきかとい  
う疑義である。もちろん、「にカ」「日カ」両方の意見を取り入れる  
と「十日に日おはしましつきぬ」と文意が通らなくなるが、「にカ」  
案・「日カ」案のどちらかに従えば文は整う。つまり傍書「にカ」「日  
カ」は、本文は「十日におはしまし」か「十日の日おはしまし」で  
はないか、という二種類の意見を提示している。

この箇所は他系統のように「十日におはしましつきぬ」とあるの  
が適当であろう。『校本』掲載の写真で確認する限り、同箇所は疑  
義を示したり補入記号を付す写本は、D類／乙類第三種本だけであ  
る。『校本』では②松乃や旧蔵本だけは「十日におはしましつきぬ」  
とあるが、『校本』冒頭の写真では②松乃や旧蔵本も「十日の〇お  
はしましつきぬ」とある。

①静嘉堂文庫本・⑥本居文庫本は、⑤本居宣長記念館本と同じく

「十日の〇おはしましつきぬ」である。中西文庫本の同箇所、巻一・  
5～6行目は次のようになっていいる。

してもろこしのうむれいといふ所に七月上旬の十日の△日歟

おはしましつきぬそこをたちてかうしうといふところに

中西文庫本には「にカ」の書入がない。「十日の」で行が終わり、  
その下欄に小さく「△日歟」と書入があり、次行から「おはしまし  
つきぬ」と続くこのありようは、③神習文庫本・⑦紅梅文庫旧蔵本  
も全く同じである。D類／乙類第三種本は書入を検討することで、  
さらなる体系化が可能になる。

### おわりに

本居学派による書写本でも、D類／乙類第三種本に属しない本が  
ある。F類／乙類第一種本の、天理図書館蔵百井為衡筆本である。

宣長の奥書はないが、以下のような書写奥書がある。

濱松中納言物語四卷本居宣長校合之本借きて写之

天保七年七月廿日 百井為衡<sup>27</sup>

『国学者伝記集成』春庭年譜によると、百井為衡（生没年不明）は遠  
州相良の一橋家家臣で、文政十年（二八二七）に春庭門人になって  
いる。百井為衡筆本にも上欄注記があるが、中西文庫本・③神習文  
庫本・⑦紅梅文庫の上欄注記とは一致しない。

百井為衡筆本以外のF類／乙類第一種本は、そのほとんどに清水  
浜臣の関与が認められる。百井為衡が見たのは⑤本居宣長記念館本

の転写本と他本を校合した本であろう。この頃、校合によって他類の本文が混じり合い、その結果、本文が複雑化したと考えられる。

『浜松中納言物語』伝本については前述のように松尾聰氏・池田利夫氏によって分類方法が確立されており、祖本へのアプローチについても、やはり池田氏によって鶴見女子大学図書館蔵本（巻二のみの零本）が九条家旧蔵本であり、現存諸本の中で最も祖形に近い本だと報告されている。<sup>28</sup>『浜松中納言物語』本文の分類は既に松尾氏・池田氏によって尽きているが、享受や本文生成については、詳しい検討がされてはいない。

新出本の調査を積み重ねつつ、諸本間の関係にも目を配ってこられた須田哲夫氏は、書人の翻刻と整理の必要性を度々述べてこられたが、本稿でとりあげたように、確かに書人から様々な情報が得られる。引き続き各系統・各諸本の関係を説明する手がかりとして書入に注目し、さらに江戸時代における書物の情報流通を巡る環境の変化も視野に入れながら、『浜松中納言物語』享受及び本文生成の様相の解明を進めていきたい。

## 注

(1) 「特別コレクション」データ詳細「コレクションID 3000000651」を参照。http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/serivet/detail.collection?id=3000000651

(2) 加納諸平（文化三年（一八〇六）～安政四年（一八五七））は紀州

藩士で本居大平の門人。物語研究の著作に『竹取物語考』がある。

書簡中の「美隆主」は河内出身の岩崎美隆（文化元年（一八〇四）～弘化四年（一八四七））で、著作に『枕草子考』がある。なお、

亀井森氏は中西文庫所蔵『枕草子』や加納諸平・岩崎美隆の書簡の調査を基に、第19回古典研究会（平21・11 於福岡大学）で「近世後期における『枕草子』研究の一齣」を口頭発表された。中西家の活動を調査する上で大変参考になった。

(3) 例えば、写本六点の中には春門による『源氏物語』講釈を聞き書した重孝筆の『桐壺聞書正月念三日開講』がある。管見の限り、書簡類に該本や『浜松中納言物語』に触れた箇所は見つからなかった。

(4) 『浜松中納言物語伝本考―本文批評の方法の実例を示すための―』（学智院大学研究年報）第1号 昭29・12。

(5) 二玄社 昭39。

(6) 『浜松中納言物語伝本系統試論』（鶴見女子大学紀要）第10号 昭42・12。後に『更科日記浜松中納言物語攷』（武蔵野書院 平1）所収。

(7) 須田哲夫氏・南昇氏・佐々木新太郎氏「未紹介本調査報告1・2 岡山大学図書館所蔵小野文庫本『浜松中納言物語』について」『大東文化大学紀要』第32号 平6・3、第33号 平7・3）、須田哲夫氏・佐々木新太郎氏・小野威氏「未紹介本調査報告3・4 茨城大学図書館所蔵菅文庫本『浜松中納言物語』について」（同第

- 34号 平8・3、第35号 平9・3）、須田哲夫氏・佐々木新太郎氏・高村春美氏「未紹介本調査報告5・6 新潟大学附属図書館所蔵佐野文庫本『浜松中納言物語』について」（同第36号 平10・3、第37号 平11・3）。
- (8) 『書誌学』昭12・1。後に『平安時代物語論考』（笠間書院 昭43）所収。
- (9) 新註国文学叢書の解説。
- (10) 注(7)の「未紹介本調査報告1 岡山大学図書館所蔵小野文庫本『浜松中納言物語』について」（『大東文化大学紀要』第32号 平6・3）。
- (11) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムの電子複写によれば、外題は題簽に宣長自筆で「濱松中納言物語一」「はままつの中納言物語二」「はま松中納言物語三」「浜松中納言物語四」とある。
- (12) 「浜松中納言物語 語彙・語句研究の初期―「目録」「類標」をめぐって―」（『平安末期物語攷』勉誠社 平9。後に『浜松中納言物語論考』和泉書院 平18 所収）。
- (13) 紙数の都合で詳細は省くが、別の機会に述べたい。なお、与清献上の『浜松中納言物語目録』は太平洋戦争で焼失した。調査に用いたのは国立国会図書館蔵の転写本である。東京大学も転写本を所蔵していたが、関東大震災で灰燼に帰した。
- (14) 松本智子氏「早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』翻刻」（『早稲田大学図書館紀要』第57号 平22・3）による。
- (15) 「新資料の紹介」（『国文学論究』第4号 昭12・2）。広島大学医角筆資料研究室の小林芳規氏編「角筆文獻目録」<http://home.hiroshima-u.ac.jp/kakuhitu/mokurokum.html>所載の一八八六番松本市中央図書館蔵「皇朝史略」（文政九年（一八二〇）板）にも印「有明里御民春廼屋」「春廼屋」「まつをかのしるし」があると報告されており、他にも同印が押された蔵書が存するようである。他日、調査を行いたい。
- (16) なお、宣長の「学業日録」安永十年の条に『濱松中納言物語』と記載があり、宣長没後七年の文化六年（一八〇九）に編まれた「鈴屋蔵書目録」や文化十四年（一八一七）以後の編「鈴屋蔵書目録」にも「濱松中納言物語 四」とある。
- (17) 引用は『本居宣長全集』（筑摩書房 昭62）による。後に引用する『石上助識篇』も同じ。
- (18) 「物語たちの失敗」（『日本文学』第52巻10号 平15・10）。他にも「物語たちの近世」（『魚津シンポジウム』第11号 平8・3）、「物語たちの分類学」（『江戸文学』第22号 平13・2）も参考にした。
- (19) 宣長と門人による物語書写については西本寮子氏「『とりかへはや』蓬萊氏本系統の伝本をめぐる考察―本居宣長の奥書を起点として―」（『国文学攷』第178号 平15・6）に詳しい。
- (20) 「浜松中納言物語研究の初期―宣長・春村の業績―」（『古代文学研究』第4号 昭54・8）。後に『浜松中納言物語の研究』（大学堂書店 昭58）、『浜松中納言物語論考』（和泉書院 平18）所収。



- (21) 注(19) 論文による。
- (22) 『和漢朗詠集』と和歌の引用は『新編国歌大観』により、私に表記を改めた。
- (23) 引用は岩波書店中国詩人選集による。
- (24) 引用・頁数は小学館新編日本古典文学全集による。
- (25) 引用・頁数は小学館新編日本古典文学全集による。
- (26) ちなみに川島絹江氏「浜松中納言物語」書誌報告二種―勸修寺家本及び浅野家本について―(『研究と資料』第39号 平10)によれば、浅野家本は題簽を改竄されてマイクロフィルムに撮影されたそうである。
- (27) 引用は天理大学図書館蔵マイクロフィルムの電子複写による。この書写奥書は『校本』に翻刻の記載があるが、「百井為卿」とし、「伝については未詳」とある。
- (28) 「粗形本『浜松中納言物語』の写し手は誰―『とりかへばや』と『恋路ゆかしき大将』と―(『鶴見大学紀要』第38号 平13・3)。これをふまえた石澤一志氏「九条家旧蔵本『歌合集』について―池田利夫氏「粗形本『浜松中納言物語』の筆者は誰―続貂―」(『国文鶴見』第36号 平14・3)がある。
- (29) 注(7) 論文。

## 付記

折に触れて御教示いただき、励ましの御言葉もかけてくださった本居宣長記念館と、電子複写への私の要望に対して快く対応してくださった無窮会関係者の方々に、心より御礼申し上げます。

## **A Study on Hamamatsu Chunagon Monogatari in the Nakanishi Collection of the Osaka Prefectural Nakanoshima Library**

Shoko AKASAKO

This study examines the history of Hamamatsu Chunagon Monogatari in the Nakanishi Collection of the Osaka Prefectural Nakanoshima Library.

The Hamamatsu Chunagon Monogatari in the Nakanishi Collection (hereinafter referred to as “Nakanishi Book”) has a title: Hamamatsu Chunagondono Monogatari. It was known that Motoori Norinaga (1730-1801) transcribed Hamamatsu Chunagon Monogatari (hereafter referred to as “Monogatari”) under the title Hamamatsu Chunagondono Monogatari, and thereafter, a number of his disciples actively transcribed Motoori Norinaga’s transcription. The text in the Nakanishi Book has the same characteristics as Motoori Norinaga’s original transcription; therefore, I deduce that the Nakanishi Book was one of the transcriptions from the Motoori Norinaga’s original transcription.

A small note written by Ajiro Hirona (1787-1817) was found in the Nakanishi Book. The same note was also found in the Monogatari’s other transcriptions: one in the Koubai Collection at the Archives and Mausolea Department of the Imperial Household Agency and the other in the Kannari Collection at the Mukyu-kai Library. By investigating these texts I conclude that these three transcriptions were related very closely.